九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「刺青」における美意識研究 : 堕落者における美の達成

吉, 美顕
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/4494498

出版情報：比較社会文化研究. 9, pp.45-48, 2001-04-01. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『比較社会文化研究』第9号（2001）45～48頁
Social and Cultural Studies
No. 9 (2001), pp.45～48

「刺青」における美意識研究

—堕落者による美の達成—

吉　　美　顕

はじめに

「刺青」は荷風の評価によって有名になった，谷崎の処女作・出世作である。「刺青」には，初期谷崎文学を貫流する大きな特質である唯美性，すなわち「すべて美しい者は強者である」という観念，及び男性征服型の女性賛美という二本の柱が顕著に現れている。従来の日本文学には見られなかった異質な主題は，自然主義全盛期の文壇や一般の文学愛好者の目をみはらせるに十分であった。そのような新しい美の概念を達成した人物は，谷崎が登場させた芸術家から刺青師に堕落した清吉である。清吉が「強者としての美」をどのように達成したのかについて考察してみたい。

1. 先行研究について

「刺青」に登場する清吉の堕落の問題についてはいろいろ論じられており，西沢正彦，上田穂積，笹淵友一などをあげることができる。彼らがどのように堕落の問題に言及しているのかについて検討していくが，これは清吉を堕落者として登場させた作者の意図を明らかにするためである。

「刺青」において，絶対的な美の創造の原動力となる人工美を描かせるために，芸術家を登場させる必要があった。ここで芸術家とは，「華美なる物の創造者」[1]である。谷崎は，絶対的な「美」の世界を表現するため，芸術家から堕落した清吉という人物を登場させる。清吉は「浅草のちやり文，松島町の奴平，こんこん次郎などにも劣らぬ名手」であり，「奇警な構図と妖艶な線などで」知られていた。しかも刺青会でも好評を博し，男性たちの「刺青の多くは彼の手になつたもので」あった。

清吉が，浮世絵師から刺青師に堕落した理由について谷崎は，はっきり示していない。西沢正彦は，「刺青」に書かれている年代と谷崎の個人的な生活を比較して清吉が堕落した原因を考察している[2]。西沢正彦は，それを裏付ける記述として明治43年5月18日付の大貫晶川宛の書簡[3]を取り上げながら，谷崎にも「足かけ五年に渉る堕落劇」があり，「刺青」の浮世絵師清吉の堕落劇には「作者潤一郎の堕落劇が二重映されていたこと」，それと谷崎の恋の問題が関係あると説明している。

西沢正彦の見る「五年前の夏」の恋愛とは，北村家の娘との恋愛であり，その恋愛の失敗が谷崎の「堕落劇の始まり」であるとしている。この恋愛の失敗の後，谷崎は「一高乃寮一番室」に入ることとなる。以前から文学に親しんでいた彼は，この時，第二次『新思潮』に参加するようになる。したがって，恋愛の失敗は，西沢の言うように「堕落劇の始まり」ではなく，むしろ谷崎が，文学の創作に傾倒するよう契機になったのだと言える。上田穂積は西沢正彦の言う，清吉の堕落に谷崎潤一郎の堕落劇に呼応させる見方には疑問が湧くと言及している。上田穂積は清吉の堕

1　オスカー・ワイルド「ドリアン・グレイの肖像」，矢口達澤訳『ワイルド全集』（日本図書センター・1995・10）57頁。

2　「三年四年は空しく憧れながらも」，「丁度四年目の夏のとあるゆうべ」，「五年目の春も半ば老い込む或る日の朝」，「丁度これで足かけ五年」と。現実の時や所から切り離たれた物語空間を持つ浪漫的作風に仕上げられた小説にあって，作者潤一郎は何故かくまで直接この物語と関わりのない“足かけ五年前”にこだわるのだろうか。それは，清吉には足かけ五年前に，この「刺青」一編の物語に勝っても劣らぬほどの劇，すなわち，浮世絵師から刺青師への堕落劇があったのである。」西沢正彦「「刺青」論」紅野敏郎『論考　谷崎潤一郎』所収（桜楓社，昭和55・5）38頁。

3　西沢正彦は次のような谷崎の手紙を引用して，谷崎の堕落劇を説明している。「五年前の夏の夜に，箱根と手を握り合つて銀坐を散歩した時，あくる年の五月に「恋ひしき恋ひしき谷崎様へ」と書いた手紙を受け取つた時，それ以来は柳橋に，天神に，州崎に，浅草に，助川に，小田原に，幾人の女の肌にふれてもついぞ味はず，忘れ切つて居た此のおののきにかくしても亦出会しやうとは！　なつかしい初夏が近づいた。僕と箱根との恋は四年前の初夏に始まつた。それから年々六月の来る毎に，若葉の香を嗅いでは昔の恋を夢みて居た。今年の初夏には第二の恋が生れたのだ。新緑の若葉の色を見，紺の香高き久留米絣の単を着換えて，新しき恋のおののきを味ふ嬉しさ。」明治43・5・18日付の大貫晶川宛の書簡。

落について本当に「堕落」なのかという問題を取り上げている。

> それは，たとえ「浮世絵師」と「刺青師」という職能の違いに，ある差別意識を考慮してみた場合でも依然として残る偏差である。この微妙な偏差を放置して，清吉の転身を「堕落劇」と位置づけるのは，やはりまだ十分でないと考えるのだ[4]。

このように説明している上田穂積は，谷崎が描写している「堕落劇」に納得ができないようである。上田は，加えて清吉の「堕落劇」は「書き手の演技」であり，「清吉の転身を『堕落』の現象とのみ捉えること」は控えたいと言っている。しかし，私見では，清吉の「堕落劇」は「書き手の演技」の表出などではなく，この作品の核心をなすものである。清吉が芸術家から人の体に刺青を刻む刺青師へ堕落しないとすれば「強者としての美」，悪魔的な女性の誕生は成立しない。このような美の展開のために，谷崎は意図的に堕落の対象として清吉を出現させたと思われる。

笹淵友一も清吉の堕落劇については，西沢とは違う意見を表明している。笹淵はそれを谷崎の個人生活ではなく，永井荷風の「あめりか物語」と関連づけて言及している。笹淵がそのように言う理由は，「あめりか物語」[5]に堕落の美学 という現象が見えるからである。笹淵はこれらの堕落を「心理の内面より外部的状況」[6]によるものと言っているが，それはむしろそれぞれの作家の内部的欲求によって，誕生したと考えられる。谷崎が意図的に頭の中で下降意識を育まなかったとすれば，この「堕落」という観念は発生しなかったと言える。

浮世絵師清吉の堕落劇は，西沢正彦の指摘する，谷崎の恋の問題とか神経衰弱よりも，むしろそれは，彼の「失遂・没落・堕落」といった下降意識でありながらも，同時に「耽美主義の発条としての堕落の意識」[7]に関係していると思われる。清吉を紙の上の芸術家である浮世絵師か生身の肉体を扱う刺青師に「堕落」させた最大の理由は，「芸術家としても堕落」[8]させるためである。つまり芸術家の下降意識の出現であると言える。

清吉には刺青師へ堕落した後も「画工らしい良心と，鋭敏とが残って」いた。それは芸術的な「良心」と「敏感」をもって女に<刺青>を彫ろうとする意志である。それは次の引用文からも窺える。

> 彼の年来の宿願は，光輝ある美女の肌を得て，それへ己れの魂を刺り込む事であつた。
> ここに清吉の生を支えている目的がある。谷崎は用意周倒に清吉の堕落を描写した後，堕落した目的についても披瀝している。清吉の堕落は清吉の宿願の達成のために，清吉の新しい「美」の創造のために必要な手段であったのである。

2.　清吉による人工美の具現

芸術家から刺青師に堕落した清吉の宿願は白い女体を求め，その上に<刺青>を彫り込むことによって強者のイメージを作ることである。谷崎が，「美しい者は強者である」という世界を描いていく足がかりとしたのが，女性の官能的な肉体美と人工美を象徴する<刺青>であった。その美の具現にとって，人工的な色彩は重要な位置を占める。

谷崎は，「自然より人工的なものを上位におき，人工的な芸術美こそ美の極致」[9]と見ていると海老井英次は述べている。それは人工的な美を求めなければ，彼の宿願である美が達成されないからである。清吉の宿願成就には，「絢爛な線と色」の人工的な<刺青>が必須条件であった。彼は技巧化による人工美を礼賛する。清吉には「自然より人工，淡彩より極彩，貧寒より豊饒」という鮮明な選択をする。明治40年代の，味も香もない「灰色の自然主義文学」[10]に対抗して，華やかな<刺青>をモチーフとしてとりあげたところに，谷崎の成功の第一の原因があったと考えられる。

4　上田穂積「『刺青』序説――書き手の変貌/その<堕落>の意味――（「徳島文理大・文学論業」3号，平成4・3）60頁。

5　「たとへば薄寒い雨の夕暮なぞ，ふと壁越に聞える話声，猫の鳴く声なぞが耳につくと，もう歯を喰ひ縛つて泣き度いやうな心地になり，突如，錐で心臓を突破つて自殺がして見たくなつたり，或は此の身をば何とも云へぬ恐ろしい悪徳堕落の淵に投捨て見たいやうなさまざまな暗黒極る空想に悩される。」「ちやいなたうん記」『永井荷風全集　第3巻』（岩波書店，昭和38・8）268頁。

6　笹淵友一『永井荷風―『堕落』の美学者』（明治書院，昭和51・4）58頁。

7　笹淵友一『永井荷風―『堕落』の美学者』（明治書院，昭和51・4）55頁。

8　細江光は清吉が堕落した理由について「谷崎が清吉を，紙の上の芸術家である浮世絵師から，生身の肉体を扱う刺青師に堕落した人間とした最大の理由は，谷崎が，文学という紙の上の芸術よりも，実生活の芸術化，言い換えれば，理想の女性と共に過ごす背徳的な享楽生活の実践に，より強く感じていた事，そしてその事に，これは人間としてはもとより，芸術家としても堕落ではないかという，ある後ろめたさを感じていた事にあったのではないか」と述べている。細江光「『像』・『刺青』の典拠について」（『甲南国文』第39号，平成4・3）104頁。

9　海老井英次「潤一郎の芸術美の展開――人工性の極みへ」『岩波講座日本文学史　第12巻』（岩波書店，1996・2）129頁。

10　三島由紀夫「谷崎潤一郎」『作家論』（新潮社、昭和45・10）50頁。

坂上博一は谷崎の「足」の描写[11]を引用しながら，谷崎の「自然観」について披瀝している。谷崎にとって自然は，女性の「足」であり，「絵の島の海辺で獲れるうすべに色の貝」や「清冽な岩間の水」という「もうひとつの自然によって，人工的に表現」されるものであった。このことについて彼は，自然というのは，「人工的な美を構築する手段以外の何ものでもないのである」[12]と言っている。坂上の話によると，谷崎の人工美は「自然を表現する唯一の手段」[13]であるということである。しかし，谷崎の人工的な美の追究は，自然に人工美を加えた人工的なものから絶対美を創造するものである。谷崎にとって自然とは女性の身体であり，その自然に彫り込む人工美こそが<刺青>である。谷崎は女体に人工美を加えることで，自分が望んだ悪魔的な女性を描いた。谷崎の人工美は自然つまり，女体の美を表現する手段ではなく，女体と刺青が共存することによって絶対美を発揮する新しい女性を作ることができたと思われる。

刺青のない女性は意味のない娘であり，美しくもなく，強者でもない。清吉の「魂」，「命」である刺青によって，娘は，美しい強者になったのである。清吉の刺青によってこの作品は完成し，その<刺青>によって「臆病な心」を持っていた娘は美しい強者へと変身する。刺青という「悪」の注入によって，「悪」という勝利を収めているのは女性である。清吉は人工美を通して新しい女性を，誕生させた。したがって清吉にとって人工的な<刺青>は必須条件であり，この<刺青>という媒介体を通して人工美の完成を収めている。

3. 清吉の<宿願>達成

芸術家から堕落した刺青師のうちに潜んでいる「宿願」は作品の軸である。作家はまず，人に苦痛を与えることに快楽を覚える刺青師清吉の姿を点出して，彼の性格を浮き彫りにする。清吉の「憧れごこちが激しき恋に変つて其の年も暮れ，五年目の春も半ば老い込んだ或る日の朝」，清吉の所に「女羽織と一通の手紙」を持って娘が尋ねる。五年ごしのその願望が達成されるべき機会が訪れた場面は，次のように描かれている。

> 丁度これで足かけ五年，己はお前を待つて居た。顔を見るのは初めてだが，お前の足にはおぼえがある。

清吉は小娘に「お前に見せたいものがあるから」と言い，娘を連れて二階へ上がる。彼は娘の手を取って，二階に上がって娘に「巻物を二本出して，先づ其の一つを娘の前」に広げる[14]。橋本芳一郎はこの巻物に書かれた末喜を，妲己のこととして，「古の暴君紂王の寵妃は妲己で，末喜は夏の暴君桀王の寵妃末喜ではないかと思う」[15]と述べている。しかし谷崎の興味を引いたのは，妲己や末喜ばかりではない。夏の桀王や殷の紂王である。夏の桀王と殷の紂王にも関心をよせた。彼らも皆旧王，先皇の政にも従わず，享楽を極めた人物である。末喜と妲己は，彼らを籠絡し国を滅亡に追いやった，悪魔的な女性であったということで共通点をもっている。

ところで娘の中に潜んでいた「美」＝「悪」（魔性）を覚醒させたのは男性（清吉）である。その結果，彼女は男を蠱惑する悪魔的な女性に変容する。女性の内部に潜在している「悪」を認識させた男性は，その女性の「肥料」になる。同じような話が，永井荷風の「酔美人」に見出される。「酔美人」では，主人公マンテロー君が一人の娼婦の「犠牲」と「餌」として描写されている[16]。マンテロー君は最初の内こそ，「自分は男である，主人であると云ふ自信を持つて，彼女をば馴れた柔順な家畜」として弄ぶつもりだったが，いつの間にか「彼女の身体を包んだ居る怪しい見えざる力の下に壓せられて」，彼女から脱することができなくなる。

「刺青」の清吉も「酔美人」のマンテロー君も，女性の「肥料」となり，一生女性の美しさに惑わされる。谷崎は美しきものの力を讃えるに当たって，美しきものの為に自らその「肥料」になることを喜ぶ人間の描写を忘れてはい

11　「その女の足は，彼にとつて貴き肉の宝玉であつた。拇指から起つて小指に終る繊細な五本の指の整ひ方，絵の島の海辺で獲れるうすべに色の貝にも劣らぬ爪の色合ひ，珠のやうな踵のまる味，清冽な岩間の水が絶えず足下を洗ふかと疑はれる皮膚の潤沢。この足こそは，やがて男の生血に肥え太り，男のむくろを踏みつける足であつた。」

12　坂上博一「谷崎潤一郎の自然観」『国文学　解釈と鑑賞　第57巻2号―特集谷崎潤一郎の世界』（至文堂，1992・2）43頁。

13　前掲書。注11と同じ。

14　「それは古の暴君紂王の寵妃，末喜を描いた絵であつた。瑠璃珊瑚を鏤めた金冠の重さに得堪えぬなよやかな体を，ぐつたり勾欄に靠れて，羅綾の裳裾を階の中段にひるがえし，右手に大杯を傾けながら，今しも庭前に刑せられんとする犠牲の男を眺めて居る妃の風情と云い，鐵の鎖で四肢を銅柱へ縛いつけられ，最後の運命を待ち構えつつ，妃の前に頭をうなだれ，眼を閉じた男の顔色と云い，物凄い迄に巧に書かれて居た。」

15　橋本芳一郎『谷崎潤一郎集　日本近代文学体系30』（角川書店，昭和46・7）437頁。

16　「ぢーツと見詰めた其の眼には明かに，お前は如何に逃げやうと急つても私が一度見込んだからには何処までもお前を自由にせずには置かないのだから……と云ふやうに思はれ，彼は全身を通じて顫を感ずると共に，もう何様事をしても駄目である。自分は此の女の餌である――鼠が猫の前に出たやうな或は狼の前に小羊が立すくんだやうな果敢ない犠牲の覚悟が，我知らず心の底に起つて来るのでした。」永井荷風「酔美人」『あめりか物語（岩波書店，38・8）64頁。

ない。清吉は「年来の宿願」を達成するため，女性に「和蘭医から貰つた睡眠剤」を飲ませて，「清浄な人間の皮膚を，自分の恋で彩らう」とする。娘の背中に「不思議な魔性の動物」の形状の刺青が刻まれるのである[17]。

谷崎の場合，刺青によって悪の勝利を収めるのは女性が示されるが，女性の悪の要素は，男性によって付与される[18]。

「魔性の動物」たる刺青に同化した，女の肉体の絢爛たる美をクローズ・アップするところに，作者の意図があったと思われる。刺青を刻まれた娘は，「悪」に目覚め男性を征服する。色上げ前には，清吉から「男と云ふ男は，皆なお前の肥料になるのだ」と言われた娘は，色上げ後清吉に「お前さん真先に私の肥料になつたんだねえ」と言っている。この娘の話からは，清吉も娘の「肥料」になっており，娘自身も「美しい者は強者」であるという認識をした。

「悪」の勝利を示す女性の背中には，清吉が創造した自然と人工の合一である<刺青>が，存在している。娘に人工美，すなわち刺青を加えなければ，女性の美，強者としての女は存在しなかった。したがってこの作品における美的表象の核は<刺青>である。刺青によって悪魔的な女が誕生する。女の背中に刺青があるからこそ，男性を支配する美しい強者が誕生したのである。

永栄啓伸は，新しい女性を誕生させた清吉は「刺青を通して<女>の背中に蘇る」[19]と言っている。しかし，清吉の役割はその刺青を彫り込むことであって，芸術家としての彼の仕事はそこで終ったと言える。「その仕事をなし終へた後の彼の心は空虚であつた」と書かれるように，清吉は刺青の仕事が終わって亡骸になるのである。したがって女の背中にある刺青は，清吉の蘇生の象徴ではなく「悪」としてみた方が妥当であろう。彼が「帰る前にもう一遍，その刺青を見せてくれ。」と言っているのは，自分の宿願の達成，「悪」の生成の確認であり，堕落した芸術家としての自分の芸術品の完成の確認である。娘の背中に「燦爛」としているその刺青は「悪」の生成とともに，共存している強者としての美しい女を指していると思われる。

清吉が考えていることは，「世の中はからツぽであ」るが，しかし「美しいからツぽ」だという饒太郎(「饒太郎」)[20]の言葉と一致している。それが清吉と饒太郎の基本的な思想であった。二人にとってこの世の中の真実，「それは美であ」[21]ったということである。真実に近いものは，「美」であると考えていた清吉の目的は，「美しきものの力」への讃仰である。

「すべて美しい者は強者であり，醜い者は弱者であ」る，これは谷崎が終始一貫して追求した主題であり，それを描写するための努力は絶えずなされた。

谷崎は，美を達成するため，堕落者清吉を通して彼の美的表象である刺青を娘の背中に刻ませる。清吉の美的な概念である人工的な美によって，男性を征服する強者，つまり新しい女性が誕生する。清吉は，「美しき強者たる女の前に弱者として慴伏する男の美学的モラルにほかなら」[22]なかった。したがって芸術家から堕落した刺青師として，清吉を設定したのである。

17　「さす針、ぬく針の度毎に深い吐息をついて、自分の心が刺されるように感じた。針の痕は次第々々に巨大な女郎蜘蛛の形象を具へ始めて、再び夜がしらしらと白み初めた時分には、この不思議な魔性の動物は、八本の肢を伸ばしつつ、背一面に蟠つた。―中略―娘の背に刺り込まれた蜘蛛のかたちを眺めて居た。その刺青こそは彼が生命のすべてであつた。その仕事をなし終へた後の心は空虚であつた。」

18　「親方、私はもう今迄のような臆病な心をさらりと捨ててしまいました。―お前さん真先に私の肥料になつたんだねえ」女は剣のような瞳を輝かした。其の瞳には「肥料」の画面が映って居た。その耳には凱歌の声がひびいて居た。「帰る前にもう一遍、その刺青を見せてくれ。」女は黙つて頷いて肌を脱いた。折から朝日が刺青の面にさして、女の背は燦爛とした。

19　永栄啓伸『評伝谷崎潤一郎』(和泉書院、1997・7) 43頁。

20　「饒太郎」『谷崎潤一郎　第2巻』(中央公論社、1981・6) 358頁。

21　「饒太郎」『谷崎潤一郎　第2巻』(中央公論社、1981・6) 359頁。

22　野口武彦「『刺青』論――谷崎潤一郎の始発をめぐって――」『現代文学講座8　明治の文学Ⅲ』(至文堂、昭和50・4) 206頁。